

報告事項シ

県内文化財の新規国登録について

県内文化財の新規国登録について、別紙のとおり報告します。

平成28年8月10日

鳥取県教育委員会教育長 山本仁志

県内文化財の新規国登録について

平成28年8月10日
文化財課

平成28年7月15日（金）、国の文化審議会（会長 馬渕明子 国立西洋美術館館長）は、熊谷家住宅主屋（鳥取市）ほかを国登録文化財（建造物）へ登録するよう文部科学大臣に答申しました。

1 熊谷家住宅主屋の国登録有形文化財（建造物）登録

- (1) 名称
熊谷家住宅主屋（くまがいけじゅうたくしゅおく）
- (2) 所在地
鳥取市鹿野町鹿野
- (3) 特徴

熊谷家の祖先は尼子氏の家臣であったと伝えられ、江戸時代には大庄屋も務めた。学者を輩出し、私塾を開設するなど、庶民教育の先覚者でもあった。当家主屋は、北側に土間、南側に南北2列各3室の部屋を並べる。梁などに残る材料の加工方法や二階の高さが低い事から江戸時代末期までには建築されたと考えられる。その後幾度かの改築を経て、鳥取大地震の被害後に、現在の形に改築された。正面の外観には千本格子を備え、鹿野の街並みを特長づけている。（江戸末建築／昭和18年、昭和32年改修）

2 原田家住宅主屋の国登録有形文化財（建造物）登録

- (1) 名称
原田家住宅主屋（はらだけじゅうたくしゅおく）
- (2) 所在地
鳥取市鹿野町鹿野
- (3) 特徴

原田家住宅は鹿野旧城下の中央に位置し、右に土間、東西2列に部屋を並べる。土間と部屋の境には「大角（だいかく）」「横角（よこかく）」と呼ぶ太い梁と桁を入れる。明治から大正期の鹿野では、それらの太さで家の興隆を示す傾向があったと考えられ、当家主屋は鹿野の歴史的景観を特長づける建物である。また、正面外観は二階を漆喰で塗りこめて下半をなまこ壁とし、一階は一面に格子を設けるが、格子の奥行きを変えることでリズミカルな印象を与えていた。櫻を多く用いて、随所に彫刻を施す。（明治33年頃建築）



位置図



熊谷家住宅主屋 外観



原田家住宅主屋 外観

3 安楽寺 本堂、経蔵、鐘楼、山門及び塀の国登録有形文化財（建造物）登録

(1) 名称

安楽寺 本堂、経蔵、鐘楼、山門及び塀（あんらくじ ほんどう、きょうぞう、しょうろう、さんもんおよびへい）

(2) 所在地

東伯郡湯梨浜町宇野

(3) 特徴

安楽寺は浄土真宗大谷派の寺院で、敷地の向いには重要文化財尾崎家住宅が建つ。当寺は尾崎家と深くかかわりがあり、現在の主要堂宇（どうう）は尾崎家の7代当主が建てたとされる。

本堂は典型的な真宗寺院本堂の形式で、正面にのみ鳥取県内には数少ない左棟瓦（ひだりさんがわら）を葺く。内部には異形の組物を置いたり、海老虹梁（えびこうりょう）と呼ばれる部材に海老を彫刻するなど、高い大工技術で独創的な意匠をみせる。

経蔵は石積み基壇の上に立つ、宝形造の建物で厚い漆喰塗りの壁により土蔵風にみせる。壁の下部にはモルタル洗い出し仕上げに目地を入れて石張風とするなど、近代的な手法を用いつつ、近世以来の境内の景観との調和をはかっている。

鐘楼は石積み基壇の上に立つ。内側に傾斜した円柱の頭部をつなぐ頭貫（かしらぬき）には地紋彫を施し、随所に獨特な彫刻を施すなど、大工の造形感覚を示す。

両脇に塀が続く山門は、本堂とよく似た異形の組物や彫刻をもち、伝統にとらわれない造形をみせる。（本堂：文化2年（1805）建築、経蔵：昭和4年建築、鐘楼：文化14年（1817）建築、山門及び塀：安政7年（1860）建築）



位置図



安楽寺本堂 外観



安楽寺經蔵 外観



安楽寺鐘楼 外観



山門及び堦 外観

4 JR山陰本線御来屋駅本屋及び旅客上屋の国登録有形文化財（建造物）登録

(1) 名称

J R 山陰本線御来屋駅本屋及び旅客上屋（じえいあーるさんいんほんせんみくりやえきほんやおよびりょかくうわや）

(2) 所在地

西伯郡大山町西坪

(3) 特徴

明治35年に山陰地方で初めて境港-御来屋間に鉄道が敷設された際に建てられた山陰線現役最古の駅舎。本屋とプラットホームからなる。本屋正面にはポーチを突き出し、屋根の東西面は半切妻として外観上のアクセントをなす。内部を従来の木造としながら、外観を洋風に近づけようとする、地方ならではの鉄道を通じた近代化を示す建築である。内部には発券所や貨物取扱所など良好な保存状態で残されている。現在は駅舎の東側部分を物産販売所として活用している。（明治35年建築／平成14年改修）



J R 陰本線御来屋駅本屋及び旅客上屋 南面



J R 山陰本線御来屋駅本屋 内部



位置図